

---

# 兵士不純1 10

猫離脱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

兵士不純 1 10

### 【Nコード】

N0829L

### 【作者名】

猫離脱

### 【あらすじ】

軽くなって空でも飛ぶつもりかい。  
夢の中ではさもあらん。  
走り屋専用。

たとえば楽しい時間はやくすぎ苦痛な時間は長く感じる。田上はこれを省略というか圧縮して月単位で計算できた。田上は規則正しい生活をくりかえしてきた報いだと考えていた。

2月は夜の九時から午前2時までが濃い時間で、疲れているときはここでねむると何時間分も多く寝た気になり疲れもとれる

またその時間にいたるまでは急に突入するわけではなくグラフの波のように頂点と谷がある。

時間のすすみを加速させたり鈍化させたりを意識的にさせるのは田上には無理な気がしていたがこれは誰かがそうしていることで個々にゆがみがしよつじているのではとおもったのだ。

だが漠然とだが時間は誰にも平等でたとえば自己に都合良く1日でも月単位でも操ろうとした場合必ずどこかでその帳尻を自己の時間でうめあわせるのだ。

そのスイッチがおくられてきてきた。かれらはさんざんに使ってきた最近そのことにきづきながら眠りにつかなければいけないかった。かれらが活発で濃密な活動をしていた間彼らにしたら眠っていたのは私だった。

あなたは時間をまわしすすめまた次に引き継がなければいけない。時を止めてはいけない。時の調和をはかつてはいけない。そもそも長い間かけて人類はこの歯車をまわしつづけてきたのだ。

しかしわたしにはやることがなかった。時間の仕組みと自由に使える

る金を手にしてまだぼんやりしているのだ。

ただ、このままでいけばわたしの時間が止まってしまっておわりだ。それと同時にまがりなりにも人類の齒車をとめることへの責任には応じかねた。

丁度部屋の整理をしたばかりだった。今回も捨てるものの他大事な物など見つからなかった。貯められるものなどなくあつたとしてもそれは部屋ではなく別のところにあるのだ。自分の中とか世界の空気とかまだ扉の向こうと互換性が保てる内に田上は至宝を引き継ぐべく旅にでることに決めた。

ぶつかるにはだ。私のやり方を変えなければならない。意図的に行動に無駄をつけ、感情に甘えをだし、世間様と交わらなければいけないだろう。

できるかどうかではなく、やるのだ。いや、やってみようと思う。なるようになるし、だめもとだし、わからないのだから、天気は晴れ、星占いは、まずはこのエリアで3週間様子見。

困うとはどういうことか貯めるとは保管するとは年金とはどういうことを考えて日がな歩いた。電車に乗り通勤気分、昼のランチ、夕べの公園。残業、時に飲み屋、コンビニ。

星占いは4位で満足していた。12分の4は悪くない。目立たないが好位置だ。1位と2位と3位には負けるが4位とは引き分けてあとは勝てる。

世界の日々の邪悪に打ち勝つために緩慢な動きで勝ち越しできるのは4位からだ。

一日起きて一位で外に出て勝って、2位で勝って3位で勝って4位

5位となつてもたまたま勝つてうまくいけば6位7位でも勝てるかもしれない。注意深くして8位で勝つて引きこもり、勝だけが続けて引きこもり、一年365日の内を勝ちあがり、次の年には前年に引きこもった分を1位2位3位で勝ち抜ける。何年かかつてでも1年のすべての日に勝ち越して記憶すれば負け知らず。あとは勝ってきたイメージだけで戦える。7位だろうが8位だろうが怖くない。勝ち続けられるんだ。

だんだん落ちてきた。これくらいであうだろうか。もう少しだろうか。

たぶんこの不安は正しい。もう少しだ。近づいている。

2

人が死ぬ話しはきらいだ。

だから最初にしてしまおう。人が死んだ。

そのせいで逃げている人がいる。

逃げる意味など気付いていない。若く見えるが25・6くらいだろう。逃げると言っても走ったり後ろを振り向いたり、誰か友人にたすけをもとめるそぶりすらない。

彼は出来上がっている。かれはそうなっている。揺るがない。何十年とそうしてきたから。そしてこれからもうしていくから。そうならないようになるにはあと何十数年かかり誰かがつきつきりで見えてやらなければならない。

一見かれは揺るぎなく歩をすすめる。誰も彼の行く道を疑わない。誰もがかれはどこかに確かなるところに向かっているとしたか知らない。そう思うものがあつたとしてもだ。

AポイントからBに入る。今日はここで休息。

我々の仕事も一休み。移動距離5。徒歩、電車。マップに線を引く。疲労はないはずだ。

どんな夢を見ている。ただそこに向かう夢か。まだ初期の段階か。地点に向かうだけか。お前のその夢は場所への到達を意とするだけか。

BからCへ。

空気は上位。水も上位。食物は中位。音楽、あるいは本といった芸術関係は下位と言うには表現が難しいが多数の氾濫という意味では下位だろう。

太陽の効果を考えたことはあるか、太陽は唯一無二の存在だ。それが消えたらどうなる。

代用品を探すのか作るのか。数で補うか、記憶を馬鹿にしちまうか。

捨て駒になるのはイヤだ。誰もがそうだ。

毒を食うのもイヤだ。負けを開始させるのもイヤだ。

HからIへ。

移動の間隔が少なくなっている。距離も時も。そろそろか。終点は。

3

葬儀があつたのが確か4年前だ。そして冬でオリンピックがあつた年だ。あれは2006

、2006、2002、1998、1994どんどん4引いていけばどうなるのか今度計算機で試そうとこんな時に思う。

父が死んだ。祖父が死んだ。4年前が祖父であれこれ親戚中が大騒ぎした。今回もそうだ。

なんとか火葬を終え、もういいだろうと思ったわけではないが、朝

早く目覚めた私は荷物をまとめ家を出た。  
夢をみたからだ。火葬を終え朝に家を出る。そういう夢だった。

朝ご飯、ホテルの朝ご飯は混雑していて食べる気が失せる。何度時間をずらしてもうまくいかなくて最後の20分しかけたらただひとりだった。後片付けを脇の方からそろそろし出そうと係の人がうかがう中、5分で支度し5分で片付けた。5分でコーヒーを飲む時間が与えられ3分で人があらかたしわくちやにした新聞に目を通し最後の1分を残し食堂をでた。

記録屋でヘッドホンをして1時間。本屋で中古の小説を立ち読み帰途につく。今日は一日足止め。夢は見ないが、音楽と本との関係はあるのだろうか。

終日ホテルの部屋でテレビ鑑賞。といっても、アメリカの映画を2本続けて見た後、サッカーの試合を眺めてまた映画、ニュース、シヨップ番組。アナログの砂嵐を無音で視聴。

しばらくホテルの部屋からでなかった。フロントとは電話でやりとりをした。一日一回ルームサービスを取ればいい方だった。2週間ほどつづいた。寝ておきて寝ておきてを繰り返した。これまでのリズムを繰り返した。二日酔いならぬ寝過ぎて頭がいたのを回避する方法も覚えた。

居づらくなるとホテルを転々とした。夢は見なかった。夢を見るために眠り見れないとわかるとホテルを変えた。それを繰り返すともはやどこにいるのかもわからない。

朝、四時半だったが外に出た。足がふらついたが目は覚めていた。街は新しく新鮮に感じられた。

まだ薄明かりで、しかし、という声にひきづられてその方を向いた。  
電信柱に二人の影がありなにか張っている。

短期仕事募集 食事宿舎完備。 バイトの広告だった。

こんなん、という声を追って声をかけた。

向こうもこっちも驚いた。

今は何時だと思っっているんだと思った。

その二人は関係者だった。

これまで張ってきた張り紙を剥がしていくことが最初の仕事になった。

4

すばらしい世界。美しい空、朝、光、風、臭い、歩み、左、右、車のガス、自販機のメニュー。

それらが続いた。

打ち付けのコンクリの冷たさと清潔感といったら活動中の蟻も穴を忘れる。花が咲いている。アフリカみたいに奪い尽くしてクリームで覆う。

きっとそうだろうと思う。

私にはそんなことしか浮かばない。私が私であるよりも私がゲームの中でロップルとしてあることが大事。やめられないしそれにしかすぎるものはない。中毒と言うがそのとおりだ。やめてしまったらそれまでの時間を振り返る勇気がない。

パラディンだってなにものか。聖騎士？。たぶんあいつだ、わたしにはわかる。管理者の一族。今度は別の手で私に関わろうとしてきているのか。何年ぶりの再会。しかしなまえがベタだ。あまりにも。過去ログもとってある隠せない。話しぶり、行動、勤務時間。要注意。しかし私の腐海にかなうはずはなくだいだいだけ、ただ存

在して言葉を発し言葉の糸を繋いでくるだけ。そこまでだ。情報網を巡らせて、あいつに注意。情報求む。さらに過去ログを探る。4年も前か、私がわーぎゃー騒ぐだけのひよっこだったころ一緒に歩いた。で、私は調子に乗ってしまつて。

いごこちのいい場所を確保して動かないのだ。その為の努力が続けている。だれにも文句は言わせない。影でいつてるのかもしれないけど表ではそんなことしたらどうなるかみんなわかつているからそぶりさえ見せない。

いらいらいらいらする。特にうまくいつていないわけではないがむしり取りたくなる。相手が機械ではだめなのだ。がんがんに潰す、言われも意味もなく潰す。そうしたことをする場がこの世界にはありそこで私は暴走天使とうたわれる。ここでの記録は時にいる人だけ記録も残らず自分に降りかかる言葉など誰も振り返らない。ただ吐き捨て潰し徹底的に連打する。爽快感とも違う。いじめでもない。聖域。なのかは知らない。呼吸をする場。息継ぎ。私はさんざんにやつつけてやってへとへとなり、ほてった体と心をもてあまし離脱し服を脱ぎ風呂場に行つて湯につかる。私はあたたかな浴室で香を焚き白い泡をふくらませ体をまさぐりタイルの上で跳ね、踊る。私はすっかり綺麗になる。浴室を出ると荒廃した部屋のあかりが神々しくも聖女を待ちわびており私はまたかと覚悟を決めるのだった。

裏、裏、裏。進めども進めども裏裏裏。それは離れていくことを意味する。まあ私の最初の目標が違っていたら近づいている。そして目標を忘れてしまつたり最初の目的が違つてきたりしたらどうでもいいことを意味する。

進めない。

消費は浪費とは違う。退屈は敵。予定をとにかくいれる。土、日、月水金。眠るのはいつでもできる。明日は仕事午後から。新しい服を買って、お金がなくなったらちよつと仕事をこなす。数日の我慢。夜にはイベントこの服を着ていこう。みんな連絡調整。集合場所に遅れずに、さあ今日はもうねるよ。ああA.L.Lだよ、朝は覚悟、今度のイベントはでかいし、昼までに終われば御の字かな、ほんと寝るから、これ以上は無理、じゃあ。明日。

今日の明日、明日の今日。

みんなそろった？いないひといない。連絡とれたら連絡して。出発15分前。

ワルシャワホワイトの扉には押すとも引くとも書いてない。中に入つてとりあえず乾杯しようか。テーブルに椅子を並べて、1・2・3・まだ足りない、足りないよマスター、まだ1階。このビル貸し切るのっていくらだろ。まだテナントはいる前だからってやり過ぎじゃね。何階だっけ42階。あーありそう。隠し階とかさ。えつたとひとり2千として2週間で、だいたい12パーティーで日250組。お金のこと考えるよりはさ、めいっぱい自分たちが楽しんだらよくないっていつもいつてること。そそ。ではではかんぱーい。

みながみな個別にどこへ向かっているのか。わたしたちは仲間で動く。止まるのを恐れて走り続ける。わたしたちはみな勇者でいかしていて怖いものはない。1段2段3段と階段を上り2階3階4階と昇り詰める。

これだから日本人は恐ろしい。こんな年端もいかな小僧にまで教育を施す。しかも訳もわからずにいさせる。ただ念として伝えるた

めだけに。それがわれわれにはどれだけ難しいか、われわれがその部分にどれだけ心をくだいているか知ってか知らずか、ここではそれが普通におこなわれる。

爺さんは杜氏は憤慨していた。小さなからだはち切れそうで細い顔が赤く上気していくのが見えた。

不老不死の話し知ってるか、内の杜氏詳しいから聞いてみな。先輩の後藤さんと島崎さんが促しぼくは聞いてみた。不老不死ってあの除福伝説とか始皇帝とか東方の蓬莱山とかですよねと気軽に話しかけたのが間違いのようだった。お前はなんでそれをしている。どこで聞いた。誰に教えられた。とすごい剣幕でまくしたてられたのだ。

あ、あー。ぼくは言葉にならずようやく、漫画とかテレビとかで昔みたことがあります。だからといって詳しく知ってるとかそんなんではないし、だから聞いたんですけどね  
というのが精一杯だった。

周りのみなはぼくらのやりとりを笑って見ているのだった。

杜氏の先祖は中国人で杜氏は今も不老不死の研究のため日本にいるのだという。ただ、一緒に生活し研修していた家族であるひとり息子が中国に帰ってしまい、今はひとりもんと日々の生活と仕事と研究に生きているのだがそれを引き継ぐべきものもないのだ。だから、いつも憤慨している。

研究について本当なんですかと聞いたときも怒られた。

怒りつくし息もきれ落ち着いたときからようやく爺さん、いや杜氏に仲間として認められた気がするからおもしろい。

ぼくは小さな造り酒屋でバイトすることになった。

本格的な仕事は来月からなのだが行く当てのないぼくはすぐにでもとその間無給でもいいからと住み込みを始めたのだった。

朝早くから起きるのは慣れていた。仕事開始に向けて酒蔵にはどん

どん人が集まってくる。

仕事の当日くるって人もいるし、後藤さんや島崎さんのようにこれから数ヶ月つづく仕事と生活に慣れるために早めに来る人もいる。

丁快山水 寮で見つけた酒のラベルをみてもぴんときない。小さな酒蔵でそもそも作られた酒の99・999パーセントは中国へ送るらしい。あとの残りは造ったおれたちが呑む権利があるとのことだった。

それにな、後藤さんが言う。

毎年味が変わるんだよ。だからさ市販にはむかねえ、オレはよ馬鹿にしてるけどさ、爺さんは不老不死の酒を造ろうとしてるのかもな、そうおもうんだよ。

そしてさ毎年中国に酒を送って試してもらう。向こうの人ももうそう期待もしてないし信じてもないはなしさ。多分さ金があまってあまって仕方がない中国のお金持ちが毎年日本から酒が送られてきて、それが不老長寿の研究をしている爺さんからの贈り物とあればみなに縁起物としても配れるし、商売的にも悪くない。爺さんはそういうところに雇われてるんだと思うね。島崎さんが続ける。

まあ、オレらの推測だけだな。

給料も結構いいし爺さんはしゃんとしてるしいなくなった息子もいいやつだった。あいつがいなかったのはかなり堪えてる見ただけやるしかないってわけさ。それから、オレら爺さん爺さんいつてるけど仕事始まったら杜氏さんだからな、まあ、それは始まればわかる。爺さん人が違ったようにそうあのお前怒られたみたいな感じでくからな、覚悟しよけよ。

杜氏を入れて8人。主として2人ひと組で作業を行った。ぼく以外はみなベテランで馴染みのようだった。ぼくは杜氏と組だった。お前が息子代わりだとみなみ言われた。杜氏の使いパシリだった。二人ひと組で運ぶものは免除させられたが、一人分のときは杜氏の分も運んだ。洗いも二人分。時に作業の指示も走って伝えにいかされ

たりした。杜氏が起きる時分に起き杜氏と同じものを同じ量だけ食べた。

食べ物については仕事に入る三日前から断食ではないが一日一食と決められていたから問題はなかった。ただ筋肉が続かなかった。深い筋肉痛で仕事をし寝て起きて仕事をし無我夢中だった。

みなに言わせればこれも気で遣ってもらってるらしい。休みはなかったが無理なことはさせないし見てるだけでいいと言うこともあった。ただ、ほぼ一日中蔵にいた。

寮とはいえ家が近くにある人は仕事が終われば帰るし休日もある。ただぼくだけはここにいろとご指名だった。

息子の代わりなんて無理だしやだなあと思っているとある休日の日言つのだった。

ただただ言つのだった。ぼくに一言もいわせず言っても言葉が通じないようなふりをした。本当に通じなかったのかもしれないがそんなことがあるのだろうか。互いに話すのは日本語なのに。

お前はなぜここに来た。大事な息子がなくなって役立たずのお前がきた。お前を息子の代わりだと思ったことはない。問題を起こされてはかなわないからワシ自身が見ているのだ。名前は何という。生まれは。父は母は。兄弟はいるか。何歳になった。

ぼくは答えなくとも良かった。答えを望んでいるわけではなかった。お前はこんなところで何をしている。お前には秘宝は教えない。お前にはつかめない。たとえお前が何か探りに来たやつだとしてもお前には無理だ。見つけることができない。

さあ仕事だ、洗え。これをすっかり綺麗にするんだお前が綺麗になったと思ったら思った瞬間からその三倍の道のりを帰るように洗いまた戻ってこい、わかるか計算はできるか。お前は馬鹿か。

さらにぼくが洗いの作業をしていると道具をだしてきてこれは何とというと聞いてくる。手を休めずに答えろというわけだった。

わからないというとかと大声でいう、お前もさあと促され何と

かと叫ぶと次々と新手の品を出してきて叫ばせる。次の日仕事場でその道具は使われ、ぼくはその道具を取ったり来たりして最後には洗いの作業が待っていた。

とにかく何かの修行のようだった。

ぼくは眠っていたが眠っていないような気がしていたし仕事をしていたが仕事のような気がしなかった。しいていえば爺さん、杜氏の人生を生きていたとでもいえないか。杜氏に生かされていたというべきか。魂を吹き込まれていった。ただそれは借り物にすぎなかったが。

休日の度に洗いながら杜氏と会話するのが日課になっていた。ある日は機嫌がよいのかお前に不老不死の薬の話をしてやろうといいだした。

ぼくはぼくがその話を聞くためにここに潜り込んだ密偵だったらと、スパイとは言わずあえて密偵という言葉をぼくは使ったのだが通じなかった。

だとしてもお前は変わったと杜氏は言うのだった。

お前ワシが何を造っているか知っているか。不老不死の薬ではない。酒だ。ワシは酒を造っている。それを知ったら息子はでていった。

息子は長い間ワシがここで不老不死の薬を造っていると疑わなかった。あれは最初から居すぎた。日本で生まれてからずっとワシについていた。最初っからそう信じて疑わなかった。

ワシは不老不死の研究はしている。薬は造っていない。ここで造っているのは酒だ。不老不死の薬は山にある。蓬萊山じゃ。息子はきつと山に入った。そして帰ってこない。

お前はここをでたらどこに行く。山にいくか、入って不老不死になるか。不老不死の薬は山にある。不老不死になりたかったら山に行けばいい。お前は見つけるだろう。息子のように見つけるだろう。息子は帰ってこない。お前は山に行くか。いったら息子に帰ってく

るように入って欲しい。まだ間にあうから帰ってきてくれと伝えて欲しい。お前が山に入ったらそうして欲しい。ワシはもう年だから酒を造るしかできない。

不老不死の話をしているのか息子の話をしているのかわからなかった。

その週は寒く、夕食になると酒がみなに振る舞われた。杜氏の許しがでたとのことでみな機嫌が良かった。そろそろ仕事の終わりが見えそうなのだ。あるものはまた田んぼ準備が始まるのでうんざりだといいいあるものは長期で温泉街に行くといった。後藤さんは観光バスの運転手とタクシー運転手の兼業が始まるらしい。島崎さんは地元で漁師。みな地に足がついていてそれぞれの生活に帰って行くのだ。ここでの生活も毎年の仕事の一部でしかない。ぼくは人生の深さを見た気がした。みな一生懸命に働くがそれも一部なのだ。また次へと進みはじめる。ぼくなんかはうんざりだというのに。小学校から中学校高校大学バイトをはじめてやめてまたはじめてその繰り返しに耐えられない。

しかしその日は生まれて初めて酒を飲んで眠くなり周りのがやがやをよそに眠りについた。

山を彷徨っていた。足下に蛇がいて驚くのは夢の中に入ったばかりの自分だった。夢の中の自分を夢で見ている自分は蛇に驚いたがもう一人の自分は蛇のあとを追っていた。足は泥だらけで息が上がっていた。すこしふらすらしていたが進む足は衰えなかった。

蛇は消え歩みは止まり大きな木の真ん中に背について休んだ。上を見上げ光が差した。まぶしかった。

6

ああいないよ。あいつはここを去った。ここには誰もいない。ワシ

以外はな。来年と2週間前にでもまた来い。そしたら会えるかもな。仕事があったら更に前に来ればいいさ。使ってやるよ。心に届かない替わりに翼を得たものよ。

ああそんな馬鹿な。田上は思わず膝に手をついた。こんなはずはなかった。慎重に進めたはずだ。彼に逃げる場所などないはずだった。もう少しのはずだった。こちらがあわせてきているのだ。彼が進むのは意外だった。

老人を見た。なにか知っている。なぜ彼を知っている。なぜ私を知っている。

手のものか。そうとは思えない。

早くここを立ち去らねばという思い、ここでしかつかめない手懸かりを求める思いが交錯して動けない。言葉が出ない。

私はまた失敗した。今度は何を得るのか。私は怒りにまかせ目を覚まし翼を広げて垂直に舞い上がった。

高く高く舞い上がりやがて疲れ果てひらひらと舞い散る木の葉のようになどり着いた山があった。麓の大きな木の下に眠る男を見つけた。

おれにあしたにむかわせてくれ。

7

イベントが終わった後ですっかり会場は干上がった。人影もまばら。私のようにタフなはいない。みなときやあぎや騒ぐのめいが、閑散とした空気感も捨てがたい。みなで酔っぱらってむちややってばいばいしてひとりになって何かほっとする。人がどんどん倒れていつて私だけが残される。歯を食いしばるでもなくひとりただ無心になる。周りの景色を眺める。わたしたちが騒いでいた場所。今度は場所が騒いでわたしたちを眠らせる。仲間はいなくなった。解散した後戻ってきて余韻にひたるのが私のやり方だ。

思わぬ拾いものか旧友より連絡が入る。

半年か一年。以前はよくきていた子だ。事情あつてしばらくこれないとのことだが連絡をよこした。

私はきれいな気持ちで返事を返す。

バーのカウンターでひとりで呑んでるきざな女の気分だ。そう。

山のこと。

聞くのね私に。

私は言つてやった。

あなたの故郷の山は北面すなわち北から見ると火の山。南から見ると水の山。火は火山。水は水よ。豊かな水を生む山。あなたは北から入って南より出るというわ。

なぜ知ってるって、それは調べたから、聞いたから。両方よ。

あなたが知りたいこと。聞きたいから答えた。昔の仲間だからうれしくて調べた。聞いてあげた。それだけ。

ほかに問題は。ない。

そお。こちらはあいかわらず。

私もあいかわらず。

今日はよかった。

そうぶつつづけ。

じゃあ、また。

ひさしぶりに私が私になつてしまった。ほんとうに疲れているが心地よさがまさつて寝るにねられない。目を覚ましながら眠っている感じ。ともあり遠方より来たるうれしからずや。部屋の掃除をしようと思いつく。ふたを開け捨てる。袋を開き投入する。掃いて集め流し込む。もうひとりの私はひと仕事もふた仕事もおえ、わたしはみしごとを終える。考えて4つめで5つ6つと考えが浮かびそれがどう結びつくかの答えが出そうなところでまぶたと閉じて眠った。少し整理された部屋でねむりについた。

綺麗な体になっていたのだろうか。仕事を終え、故郷に帰る。一升瓶を2本力バンに詰め一本の口は開いていた。食事を取る気がしない。街は塗りたくられていて騒音がひどかった。人々と臭いが充満して目障りだった。食欲がない。お腹がすかない。酒の80パーセントは水だという。ぼくはそれを少しずつ吞んで進んだ。すこしずつだ。

街はいろどられ目に痛く騒音とわざわざの行ったりきたりが多すぎた。人々が街で生きているのを見るとうんざりした。自分が普通の人の膝のあたりの空気を通る地下鉄の乗車員のように感じられた。とにかく隙間を見つけて汚染していくのが時間なのだろうか、高きから低きへ流れる水の条理が常ならば、見えないところで蒸発しているのは誰の作業なのだろうか、そういったことをしている人。見えるのは見えるところ、見えないところでも見えないところ。それ以外の隙間。あれとこれということは2つ。

ようやくすいてきたように感じた空腹感を満たすのは先に進むために必要と昔の名残のように動機付けとある食事所に入り注文品を一口口にしたがそれ以上食が進まなかった。食い逃げではあるまいがそのまま帰ることの申し訳なさが誰にも見つからないように店を出ようという気持ちに拍車をかけた。

店を出てすぐにも口に口内炎ができそうな感じは、内部からの自己崩壊の励みだった。

その後、食事無しで故郷の山の入り口に立った。

2級。私は2級だが私のは違う。1級、いや特級だ。私は自己分析ができる私は2級品だ。そしてそれすら危うい。時々がたつく。焼きが回る。流される。それはもう2級ですらない。維持、維持に努める。2級とは3級の上。1級のした。そこにいること居続けるこ

と。

私が2級から特級に上がったのはリアル世界ではなかった。最初そこでも2級そこそこの私がいたのだが私を導いてくれる師のもとで私は成長した。

誰とどんな時間を生きるか。

師はここも一つの世界だと入った。現実もそんなに変わらない。だから誰とどんな時間を生きるか。私にしてみれば師と過ごす時間が人生の意味に感じられた。私はただ生き時々ふさぎ込んだり時々ぎやあぎやあさわぐだけのやつではなくなっていった。目的を持ち仲間を集い達成し、反省し成長していった。そのなかに師がいた。いつも師が見守ってくれていた。助言を仰ぎ、時にひとりで判断し、時に助けられたり助けたりした。

それでよかったのに、時が来たなんていつて見捨てられるなんて。それだけならまだしも裏切られるなんて。ただの仕事で義務で心ない言葉をかけてきていただけだなんて。

猛然と生きた。見たくないものを見ないために少々の見たくないものは師の喪失に比べれば見たものに過ぎなかった。

毎日戦った。一日が一時間のようだった。息つく暇もなかった。誰かが替わりに眠ってくれる気がしていた。食事の間すら惜しんだ。昇り詰めた。昇りつめていた。

私にかなうものはなく私ほど知るものはいなくなった。私は世界を知り尽くした。新しい明日がくればすぐにも飛びついて先頭を切った。中盤も事後処理も、新人教育もみな引き受けた。私は2級のままだった。時々落ち込んで崩れつつもその世界での私は1級であり特級であった。

私の意のままに動く片割れが数人。私を慕うもの、半ばあきれつつもついてくる仲間。敵対する勢力。私はそれらに立ち向かう。

もがき苦しむがやがて快方に向かう。人々の賞賛、伝説、噂話。

私は今日もここに生きる。

自らそれを試す。山の中で。

生きて帰ればそれすなわち不老不死の薬をえたこと似るのではないか。

自然対自分 自分対自分 2たい1。

巨人对こびと 自分対自分

絶食状態に耐えられるようになった。ぼくは夜になるのを見計らって山に入った。それは端からみれば死にいくようなことであり、ふらつと近所の自動販売機までサンダルでいくような所ではなかったからだ。

幸いリュックはしょっていたからそれなりの格好ではあるのだろうが、ぼくは死とか恐怖とかは抱かず進んでいった。山へ向かい進むとはすなわち頂上にいくことなのだろうが進む方すら途中からどうでもよくなってしまった。

登山道をそれそれこそ獣道を進む。朝露の滴はそれこそ甘露であつたし山の霧は体にしみるようだった。恐怖など感じない。暗闇を恐れない。眠くなると眠った。幸い季節は温暖で瓶中の酒一杯に頼るだけで眠ることができた。ぼくは山を彷徨う。命がかかっていることが半分以上しか理解できていない。なかおそれなどないのだ。異常な行動に違いない。無謀な行動である。が、それすら気にしないあるいは最初から感じなければただの散歩だ。ぼくは目が覚めていた。だから進み続けた。道に迷い村落にたどり着けばそれで終わりだとも考えていた。

ただ、山の奥に進んでいる気はしていた。

眠っているようで眠っていないのだ。本当に眠っていれば死んでいてもおかしくはない。いごちのよい日当たりのよい場所で太陽の光を浴びるのは日課になりつつあった。風の吹く向きがかわる瞬間がある。気圧というのだろうか天気の変わり目、昼と夕の境目夜の兆し、ぼくは山の中に居場所を見つけようとしていた。これは本能

なのだろうか。定住にはしる。歩き進み続けることの意味などないのだろうか。

体が一回りちいさくなった感じだが小さな塊としてとぎすまされた気がよりいっそうする。

山のを食べる。見分けて食べる。必要な分だけ食べる。うまくできている。山が生かしてくれる。

移動か定住か、山が生かしてくれることを知ったときから定住が始まった。縄張りを決めてその周囲を日があるきまわる。何のためか、食料を得るため。悲しいかな食料を得るため。帰ってすみかで酒を飲んで心地よい眠りにつくため。

それはおかしいのではないか。夢を見た。続きがあるのだ。まだ夢を見るのだ。先へ進まなければならぬ。山が生かしてくれるのはわかった。ぼくは山に捧げるのだ。ぼくは不老不死の極意を薬を手に入れるのではなかったのか。

山から帰るのではないのか。

それは頂上を目指すことだった。あるいて進んだ。かなり鼻がきくようになっていたし無理もしなかった。計画といえば計画通り予定通りにことは進んだ。

頂上に立ち一晩休んだ。寒かった。朝日が上がり暖かかった。ここでは定住できそうになかった。そして進む道もはやなかった。立ち往生が続いた。そこで生き続けた。

そこにいるだけで生きていることだった。

なにかが麻痺してくるようだった。戻ることは考えつかなかった。

先の道は決して見えてこなかった。そして心地よい眠りは訪れなかった。

ある夜、出会った。

夜だったが白い霧の束が立てに見えた。

杜氏の息子さんだとなぜかわかった。

彼は言う。

今は山と山を渡り歩いてる。

山の名前はそこに住む人の名前でもある。大抵の山には名前がついている。そこには必ずいる。

人が。ですか、ぼくは言う。

人がいる。

名前のついていない山にも名前がある。

われわれの世界の名がある。

山は名を捨てるときがある。そのとき子を選びそこに残す。私は今山を渡り歩いていて、やがていつかどこかの山の名になるだろう。お前もそうしないか。

私のいつていることが、おかしくないか、お前はわかるだろう。

腹が減ってないのに食べあいてないのにあいしおかしくないのにわらうなきたいときになかずやすみたいときにやすまずいいたくないことをいう。

お前もこっち側にこい。

もう半分以上こっちに来ている、あとは意識だけだ。こっちにいるという自覚だけだ。

目覚めているからもう眠らなければいい、食べなければいい、呑まなければいい、感じなければいい。

それが不老不死ですか。ぼくは杜氏の息子にいった。

5000入れて500だす。のが生活。10000入れて10000だす。入るものと出るものは違う。常に自分であり自分でない。

山では

5000入れて自分を500にして元の自分を出す。

10000入れて自分を10000にして元の自分を出す。

やがて50000そのものになり10000000000になり5000000000になり

意識がとおざかる。

夢の中だった。杜氏の息子は龍蔵と言うのだった。お前は寝てしまった。お前はここにこれない。まだこれない。起きたらここを去れと言った。

ぼくはなまいきにもあなたこそ山を下りて私と来ませんか、杜氏にあつてやったらどうですかと言った。

龍蔵は無言だった。

霧のようで光り輝いてまぶしくて目を開けると昼だった。ぼくは山を下りた。

道は街へと続いていった。

果てしなく続いていて迷路のようだった。

ぐるぐる回ったがようやく家にたどり着いた。

そこでぼくはまた寝た。

続

くと思われる

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0829/>

---

兵士不純1 10

2010年12月17日19時09分発行